

小学校第1学年及び第2学年の音楽科教育における 「言語活動の充実」

飯泉 祐美子

The first grade and the second grade elementary school
Music Education
"Substantiality of the Language Development"

Yumiko IIZUMI

「音楽を知覚する」ことは主体的な音楽活動を成立させる中核となることである。

小学校音楽科の学習について、言語活動を充実させることによって、たとえ低学年であっても「音楽の知覚」をすることができるのではないかと考え、そのための言語活動を模索し、論を進めた。

1. はじめに…問題提起

もし、ジャンルを問いませんという前提で、「あなたは音楽が好きですか？嫌いですか？」「音楽番組をよく視聴しますか？」「コンサートに足を運ぶことはありますか。」等と尋ねた場合、きっと多くの人々は肯定的な回答をするであろう。この回答だけをもとに「一般的に音楽を愛好する人は多いのか？少ないのか？」と考察した場合、「多くの人々が音楽を愛好している。」という結果が予想される。

では具体的に「音楽と、どのような関わり方がきっかけで、音楽を愛好するようになりましたか？」と尋ねた場合「音楽を表現することがきっかけで音楽を愛好するようになりました。」という人ももちろん多数予想されるが、大半の人々は、「音楽を聴くことがきっかけで音楽を愛好するようになりました。」というだろう。

これらの結果より、多くの人々は、音楽に「聴衆」として関わっているといえるのではないか。この場合、どのステージ（レベル）で音楽を聴取しているのかとなると結果は様々であろう。

どのステージ（レベル）で音楽を聴取していると「よい聴衆」といえるようになるのだろうか？

どの程度の音や音楽を知覚し、そのよさや特質を感じ取りとっているのだろうか？「聞き流し」は「よい聴衆」といえるのだろうか？

第8次学習指導要領における音楽科改訂の趣旨、(i)改善の基本方針の上位項目として、「音楽科、芸術科（音楽）については、その課題を踏まえ、音楽のよさや楽しさを感じるとともに、思いや意図をもって表現したり味わって聴いたりする力を育成すること、音楽と生活とのかかわりに関心をもって、生涯にわたり音楽文化に親しむ態度を育むことなどを重視する。」「このため、子どもの発達段階に応じて、各学校段階の内容の連続性に配慮し、歌唱、器楽、創作、鑑賞ごとに指導内容を示すとともに、小・中学校においては、音楽に関する用語や記号を音楽活動と関連付けながら理解することなど表現と鑑賞の活動の支えとなる指導内容を〔共通事項〕として示し、音や音楽を知覚し、そのよさや特質を感じ取り、思考・判断する力の育成を一層重視する。」とある。

即ち、「音楽を知覚する」ことは、主体的な音楽活動を成立させる中核となるものである。

どのような学習が学習効果を高め、やがて「音楽を知覚する」と言えるレベルまで到達させることができるのだろうか？

ここに第8次の学習指導要領の改訂の目玉である「言語活動の充実」はその大きな手掛かりになるであろう。

本論では「言語活動」を手掛かりに論を進めていく。

2. 「言語活動の充実」と音楽科教育…その経緯

今回の第8次の学習指導要領改訂に伴ない「知識基盤社会」の時代を担う子どもたちに必要なキーコンピテンシーとして、「単なる知識や技能だけではなく、技能や態度を含む様々な心理的・社会的なリソースを活用して、特定の文脈の中で複雑な課題に対応することができる力」を求めるようになった。これは具体的にいうと、①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する力、すなわち、言語、シンボル、テキスト、知識、情報、技術などの道具を相互作用的に用いる力。②多様な社会グループにおける人間関係形成能力、すなわち、他人とよい関係を構築し、協力し、争いを解決する力。そして、自律的に行動する能力、すなわち、大きな展望を持ち、人生計画や個人プロジェクトを設計し、実行したり、自らの権利、利害、限界やニーズを表明し、自律的に活動できる力。これらの力が求められているのである。

キーコンピテンシーを学校教育で育成する能力の具体として、リテラシーがある。特に日本においてはPISA型「読解力」(Reading Literacy)の育成を通し、思考力・判断力・表現力の育成を図ることが、今回の学習指導要領改訂の重要な課題でもある。

そこに求められている学力は、これまでの知識の習得と再生とを求める学力のみではなく、思考力・判断力・表現力ということを機軸とした学力である。この学力の育成は、言語活動を通して行われる。そのため、今回の学習指導要領において「各教科などにおける言語活動

の充実」が示されている。

このリテラシーの中で、その中心となるのがPISA型「読解力」である。読解力とは、「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力」である。そのためのプロセスとして、①テキストに書かれている情報を正確に取り出したり、②書かれた情報がどのような意味を持つかを理解したり、推論し、解釈し、③テキストに書かれていることを知識や考え方、経験と結びつける。

ここで求められているものは、言語を使用した、「受信→思考→発信」という一連のプロセスである。

これらは総てに言語を活用しており、ここに「言語活動の充実」の意味がある。

音楽科教育において、長年、歌唱指導のための歌唱活動、器楽指導のための器楽活動、鑑賞指導のための鑑賞活動、創作指導のための創作活動という形態の教育がなされてきた。そのため、児童の心の中には「この歌をうたったことがある。」とか「この曲を知っている。」など授業で取り扱った教材に関する記憶があったとしても、学習されたはずの中身の大半はどこかへ行ってしまっている。また、教師やリーダーとなる児童・生徒がいないと学習活動が進まないという現実もあった。音楽科教育において「受信→思考→発信」という一連のプロセスがあったのかと考えると、疑問が残る。

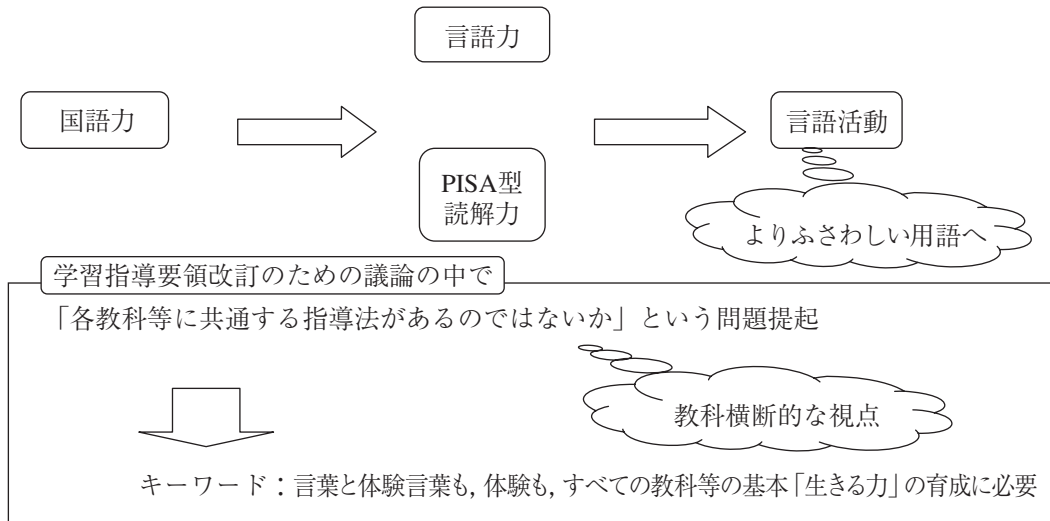
音楽科教育の本来の意義は何であろうか。音楽の情報を正確に読み解き、理解することこそが「音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」「音楽を愛好する心情を育てるとともに、音楽に対する感性を豊かにし、音楽活動の基礎的な能力を伸ばし、音楽文化についての理解を深め、豊かな情操を養う。」という目標に到達するのではなかろうか。

「言語活動の充実」は中央教育審議会が平成20年1月の「答申」の中であげている〈教育内容に関する主な改善事項〉7項目のうちの1つとしておいているものであり、音楽科のみならず、全ての教育活動の中でその能力が強調されているものである。

したがって、音楽科教育においては、音楽科の特性を生かし、さらに音楽の力も同時に高まるような「言語活動」こそが「音楽の知覚」へと導いていくのであろう。

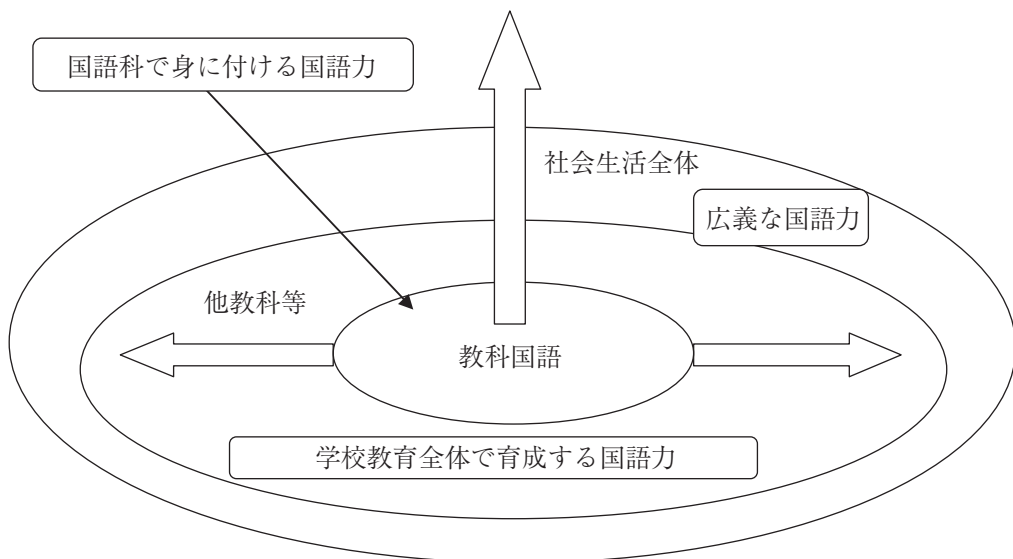
3. 「言語活動」のイメージマトリックス

まず第8次改訂の学習指導要領でいう「言語活動」を整理する。
文部科学省教科調査官 西辻正副は以下のように整理している。



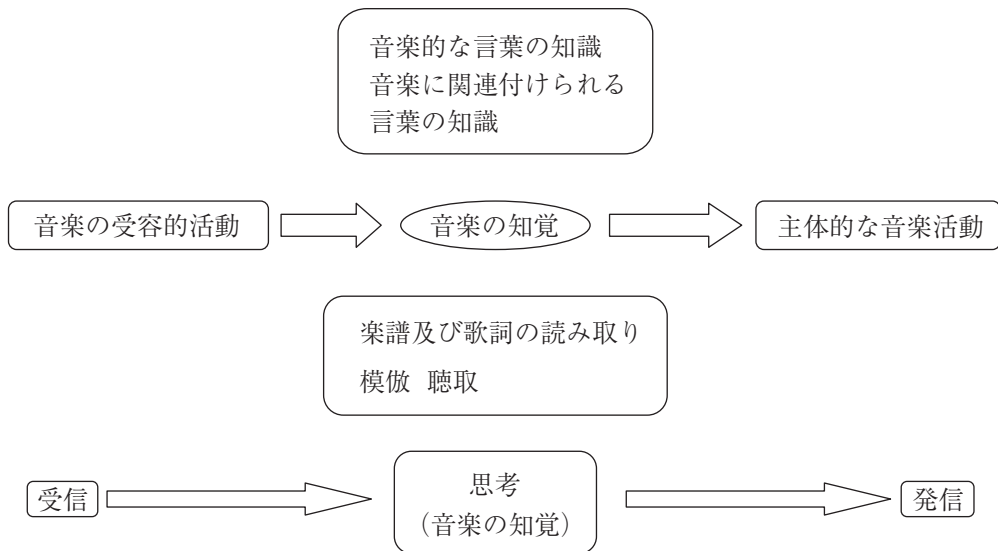
〔図1〕「言語活動の充実」への用語の整理 西辻

また、国語力についてであるが、国語力のイメージについても西辻は次のようなマトリックスを提示している。



〔図2〕国語力 西辻

では、西辻のいう「言語活動の充実」への用語の整理〔図1〕を小学校音楽科教育にあてはめて解釈した場合に以下のように整理できる。



〔図3〕音楽科教育における言語活動 飯泉2010

小学校低学年段階は、幼稚園教育の流れを受け継ぎ、「受信」レベルの「音楽の受容的活動」については大半の児童はほぼ問題なく、スムーズに活動できることが予想される。然し、「思考」レベルとなると〔図2〕のように広義にわたるので、ボキャブラリーの個人差や成育歴の個人差が顕著にあらわれる。

この思考を伴う段階が「音楽を知覚する」段階なのである。音楽科教育においては「知覚」に必要な言葉を学習しながら「読解」することにより、PISA型「読解」として「思考」レベルへ到達する有効な活動となると思われる。

4. PISA型「読解力」と小学校音楽科教育の「言語活動」

では、小学校音楽科教育における「言語活動」について考えてみたい。

PISA型読解力とは自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発展させ、効果的に、社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、思考する能力である。音楽科の学習においてはテキストとは楽譜及び楽曲の歌詞などである。また鳴り響く音楽自体もテキストとなるので、音楽を特徴付けている要素や仕組みを感じ取り、読譜に必要な知識を知的に理解したり、歌い方や楽器の奏法を模倣したり、知的に理解する力が「PISA型読解」である。生涯にわたって音楽を愛好し、自分の生活に生かす力にも通じる力である。

では、第1学年及び第2学年における「言語活動」について整理する。ここでは小学校学

習指導要領の第1学年及び第2学年の2内容A表現B鑑賞〔共通事項〕を「言語活動」の3つのステージ及び教育芸術社発行平成22年3月10日に検定済みの教科書「小学生のおんがく1」「小学生の音楽2」の単元を用いてカテゴリーに分類することによって、言語を使用する場面、思考のきっかけ、手掛かりの言語、読解の場面等を考察する。

記号の説明

「言語活動」…「受信」…音楽の受容的活動………… J

「思考」…音楽の知覚…………… T

「発信」…主体的な音楽活動………… S

	言語活動	教科書の単元	言語を使用する場面 思考のきっかけ、 手掛かりの言語 読解の場面等 教師の言葉掛け等
A 表現			
(1) 歌唱の活動を通して、次の事項を指導する。			
ア範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりすること。	T	音の高さに気をつけて歌おう	音高に関する言葉の概念 高い⇔低い○ 大⇔小×
イ歌詞の表す情景や気持ちを想像したり、楽曲の気分を感じ取ったりし、思いをもって歌うこと。	T→S	音楽を楽しもう 拍を感じとろう 拍にのってリズムを打とう 様子を思い浮かべよう	歌詞の意味 雰囲気に関する言葉による ゆったり 軽やか 激しい 静か…等
ウ自分の歌声及び発音に気を付けて歌うこと。	T S	互いの音を聴こう	強弱に関する言葉の概念
エ互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌うこと。	T→S	歌で仲良しになろう	共鳴に関する言葉による 共鳴の体感
(2) 器楽の活動を通して、次の事項を指導する。			
ア範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏すること。	T	鍵盤ハーモニカを吹こう 色々な音に親しもう	音階のイメージの視覚化

小学校第1学年及び第2学年の音楽科教育における「言語活動の充実」

イ楽曲の気分を感じ取り、思いをもって演奏すること。	T→S	色々な音に親しもう	音量の増幅のイメージ及び体感
ウ身近な楽器に親しみ、音色に気を付けて簡単なリズムや旋律を演奏すること。			
エ互いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合わせて演奏すること。	J T→S	互いの音を聴こう	聴取 他者との協和
(3) 音楽づくりの活動を通して、次の事項を指導する。			
ア声や身の回りの音の面白さに気付いて音遊びをすること	J T	拍にのってリズムを打とう	新しい発見による
イ音を音楽にしていくことを楽しみながら、音楽の仕組みを生かし、思いをもって簡単な音楽をつくること。	J→T	拍にのってリズムを打とう	新しい発見による
(4) 表現教材は次に示すものを取り扱う。			
ア主となる歌唱教材については、各学年ともウの共通教材を含めて、斉唱及輪唱で歌う楽曲	J→T	互いの音を聴こう	他者との協和
イ主となる器楽教材については、既習の歌唱教材を含めて、主旋律に簡単なリズム伴奏や低声部などを加えた楽曲	J S	色々な音に親しもう	他者との協和
ウ歌唱共通教材（省略）			
B 鑑賞			
(1) 鑑賞の活動を通して、次の事項を指導する。			
ア楽曲の気分を感じ取って聴くこと。	J S	様子を思い浮かべよう	雰囲気の変化の聴取
イ音楽を形づくっている要素のかかわり合いを感じ取って聴くこと。	T S	音楽を楽しもう	音の動きの聴取

ウ楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲や演奏の楽しさに気付くこと。	T	色々な音に親しもう	楽曲のイメージ
(2) 鑑賞教材は次に示すものを取り扱う。			
ア, イ, ウともに鑑賞教材選択の観点(省略)			
〔共通事項〕			
(1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を指導する。			
ア音楽を形づくっている要素のうち次の(ア)及び(イ)を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取ること。	J T S	拍を感じ取ろう 拍にのってリズムを打とう 拍のまとまりを感じ取ろう	楽曲の面白さ 楽曲のよさ 楽曲の美しさ等
イ身近な音符、休符、記号や音楽にかかわる用語について、音楽活動を通して理解すること。	T	拍にのってリズムを打とう	音楽に関わる用語全般

5. 考察

以上、小学校第1学年及び第2学年の音楽科教育の学習内容の約8割が、「音楽を知覚する」学習活動であることがわかる。然し、教育現場の現状はどうであろうか。

第1学年及び第2学年の子どもたちの多くは語彙が乏しく、ややもすると幼稚園の活動の延長になってしまい、ただ、表現することのみで終わってしまうことも多い。鑑賞に関しては何を「聴取」すべきかわからず、その場しのぎになってしまうこともある。音楽科の授業は楽曲を教える為だけのものではない。楽曲は音楽科教育実現の為のツールなのである。これこそが、「音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育てるとともに、音楽活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」に通じるのである。つまり、的確な教師の助言や言語の使用、ミスマッチのない場面展開を心掛ければ「音楽を知覚」出来るようになり、低学年でも「受信→思考→発信」即ち「音楽の受容的活動→音楽の知覚→主体的な音楽活動」というプロセスで学習することが出来、一定の効果を上げることが出来ると思われる。

今後は、授業のあり方について引き続き考察し、さらに、中学年、高学年と同様の考察を試みたい。

6. 参考文献

- | | |
|-------|--|
| 文部科学省 | 『小学校学習指導要領』 平成20年3月 |
| 文部科学省 | 『小学校学習指導要領解説 音楽編』 平成20年8月 |
| 教育出版 | 『小学校学習指導要領 新旧比較対照表 平成10年版×平成20年版』
平成20年4月 |
| 高木展郎 | 『各教科等における言語活動の充実－その方策と実践例』「教職研修総合特集新学習指導要領実践の手引き」平成20年11月教育開発研究所 |
| 西辻正副 | 『「読解力」の向上を図るための学習指導の改善』配布資料 |
| 教育芸術社 | 『小学生のおんがく1』平成23年3月 |
| 教育芸術社 | 『小学生の音楽2』平成23年3月 |